

令和7年度 農村RMO推進フォーラム in 兵庫

パネルディスカッション

日 時：令和7年12月15日（月） 13：20－16：40

場 所：兵庫県農業共済会館 7階大会議室

【コーディネーター】

和歌山大学 教授 岸上 光克 氏

【アドバイザー】

神戸大学大学院 教授 中塚 雅也 氏

【パネリスト】

鉦打ふるさとづくり協議会 事務局長 村田 正明 氏

豊かな郷づくり協議会 会長 尾崎 治男 氏

与布土地域自治協議会 事務局長 奥 幸之 氏

農林水産省 農林水産政策研究所 政策研究調整官（首席） 新田 直人 氏

農村 RMO に取り組む際の初期段階での苦労や、地域住民の合意形成の難しさなど、どのように課題を乗り越えたのか。

岸上氏(コーディネーター)

**尾崎氏(豊かな郷づくり協議会)：**

- ・ まずは「農業を楽にできないか」とか、「若者が減ってきた」という中で、そういうつぶやきや疑問点を皆で話し合ったら、「これをどうしたらよいか」「これをどうやって解決したらよいか」という問いが生まれた。
- ・ ノーベル生理学・医学賞受賞者の坂口氏が語った、ノーベル賞受賞の秘訣は「時には、そのドアを開けて、橋をわたり他の人と交流を持つこと」だとい

う。何かを始めるにあたっては、この姿勢が大切だと感じている。

- ・ 私たちもまずは「何かできないか」という思いから行動した。当初は国や県、市に相談したところ、積極的な支援を得てプロジェクトを進めていた。しかし、人事異動により担当がいなくなり不安を感じたものの、その後も行政機関からの助言を得られた。この経験から、困った際にはまず国・県・市に相談することが第一歩だと思う。

#### **奥氏(与布土地域自治協議会)：**

- ・ 私たちの地域は、農家から課題を提案された。専業農家が高齢化により引退していくことで、農地が個人に返還され、その結果、返還された農地の扱いに困る農業者からの相談が増えるという課題が生じた。この問題に直面している人たちをどのように支援すべきか、また、どれくらいの人が同様の悩みを抱えているのかを把握するため、農業座談会を開催し、意見を募った。その結果、やはり担い手不足を訴える声が多く聞かれた。担い手がないということは、誰かの協力なしには農業が成り立たない状況が生じるということ。人口が少ない地域で人材を確保するには、公益的な視点に立ち、スタッフを募り協力を得るしかないという発想に至った。「組織を作る」と言うのは簡単だが、それを継続的に運営していくことが重要であり、より持続可能な運営を目指し、しっかりとした法人組織を設立する必要があるという結論に至った。
- ・ 自治協議会は住民総意がなければ決定が難しいという仕組みだったため、より小回りの利く運営を目指して一般社団法人を設立した。この法人が、人を動かす活動を公益的に行う中で、自然と公益活動へと発展していったのが始まりだと考えている。

#### **村田氏(鉦打ふるさとづくり協議会)：**

- ・ 平成 20 年、合併から約 3 年が経過した頃、住民の皆さんから「住民の力で 10 年後のビジョンを作ろう」という声が上がった。冒頭で「鉦打ふるさとづくり協議会は協議するだけの場」と申し上げたが、そこで「10 年後の鉦打を

残すためにどうすれば良いか」を徹底的に話し合った。その際、誰もが共通の、そして最大の課題として挙げたのが農業だった。農業問題を克服できれば、10年後も地域は存続できるのではないか、という意見が出た。しかし、役員だけで動いてしまっただけでは、また以前と同じような形になってしまうため、いかに住民を巻き込み、納得させるかが重要だった。私が冒頭で「みんなの課題は何か？」と問いかけたところ、案の定、農業が挙げられた。このように、住民自身が課題を提起し、それを深掘りしていく中で、「再整備を行おう」という住民の熱意によって動き出したというのが裏話。

10年後を見据えて農村 RMO を運営しているのか、それともまず目の前の課題があってそれを解決するために進めているのか。

岸上氏(コーディネーター)

**尾崎氏(豊かな郷づくり協議会):**

- ・ 個人的には、10年先を見据えるのは難しいと感じていたが、農村 RMO を通じて国や県の方々から制度について教えてもらいながら事業を始めたがあつという間に1年が過ぎた。10年という期間は比較的早く過ぎ去ってしまうのではないかと思う。
- ・ 一番心配しているのは、この意思を引き継いでくれる後継者が現れるかどうか。5年後、10年後といった将来において、現在の状況と同じような熱意と、その時代の背景に合わせた後継者を育成することの方が、より困難なのではないかと考えている。

**奥氏(与布土地域自治協議会):**

- ・ 事業展開の内容にもよるが、私たちのまちづくり計画は長期的な展望に基づいて策定している。ただ、目の前の状況を鑑み、短期目標もその都度、現状に応じて柔軟に変更していく必要があると考えている。
- ・ また、本当に将来を見据えるならば「40年先を見なさい」と教えられたこと

がある。内容によっては、長期展望を常ににらみながら計画を進めるべきと考える。例えば、ライフラインや下水道といったまちづくりは、その典型である。将来的に人口が減少していく中で、広範囲にわたる中山間地域の道路整備などを考えると、非常に非効率。そのような状況において、コンパクトシティのような考え方を取り入れ、より効率的なまちづくりを進めれば、公共交通の利便性向上や、除雪作業の期間短縮・時間短縮など、様々な問題が解決できる可能性がある。このため、事業内容に応じて目標を柔軟に設定することを心がけている。

(新田氏へ)

尾崎氏(豊かな郷づくり協議会)や奥氏(与布土地域自治協議会)のような取組方は特殊なのか。それとも、どこの農村 RMO も同様にスタートし、進められているのか。

岸上氏(コーディネーター)

#### 新田氏(農林水産政策研究所):

- ・ 奥氏の話にあったが、長期的な視点と短期的な目標は両方必要だと感じた。私は市の職員をしていた時に、林業の将来について集落座談会に出て、「30年後、40年後をどうするか」を問いかけたところ、「その頃には皆死んでいる」という反応で、議論が全く進まなかった。その際、「農業は1年で成果が出るから話しやすい」と言われたことを覚えている。農村 RMO 活動の中心となるのは、おそらく60代後半の方が多いと思うので、「まず何かやってみよう」ということと、それを支える行政職員は10年後を見据えるという、その両方の視点が大事なのではないかと感じている。
- ・ 本日紹介した高知県梶原町なども、集落活動センターという地域運営組織として何十年にも渡り取り組まれてきたが、その過程で集落組織の問題など、様々な問題があったと思う。そういう時に、農村 RMO 事業を活用していくなど、そのあたりの目利きも行政の役割なのではないかと思っている。

**中塚氏(神戸大学大学院 教授):**

- ・ オンラインの質問にも合わせて回答したい。「若い人や女性をもっと参加させたほうがよい」という話について、「それはなかなか難しく、どうやったらよいのか。」という質問がオンラインで入っている。おそらく初動期など、様々な局面でそういった方々にも参加して欲しいと考え、事例発表の皆さんも様々なやり方で工夫されてきたと思う。私が思うに、まず何もかも一緒にやるというのは相当難しいということである。行政の方々は「全員で話し合いましょ」とよく言うが、それは難しいと思っている。理解を得られるのであれば、若い人、あるいは女性だけといった形で、最初に個別に話し合いを進めるほうが、スムーズに議論できる場合もある。合意形成が大事だとあまりに強調されすぎた結果、別々に話し合うことが駄目なように捉えられがちだが、状況に応じて分けていくことも一つ大事なことだと思っている。
- ・ また、この質問に関わる地域計画などの話は難しいところがあり、語弊がある言い方かもしれないが、「計画」という言葉や行為自体が男性的な印象を持たれてしまうことがある。若い人にとっても難しいかもしれないが、「困っていることは何か」という議論であれば入りやすいと思う。「計画をつくりましょ」とか「RMOをつくりましょ」と呼びかけるのではなく、「困っていることは何か」や「農地のことで困っていないか」と問いかけた方がよい。高齢女性の中にも、自分が一人で残されて田んぼをどうしようかと困っている方もいるだろう。そういう方が「これが困っている、だから話し合いをしたい」と言ってくれる。しかし、それをお父さんたちと一緒に話すのは嫌だから自分達だけで話を進めればよい、という話もあると思う。そのように、最初のスタートを少し工夫することで、話が進みやすくなるのではないかと思う。

(村田氏へ)

鉋打ふるさとづくり協議会では、話し合いの進め方をどのように工夫したのか。

岸上氏(コーディネーター)

**村田氏(鉋打ふるさとづくり協議会):**

- ・ 令和4年からの農村 RMO 事業に取り組んで、10年後のビジョンづくりの時は、中塚先生がおっしゃったとおり、女性だけのワークショップの日や、40歳までの若者(女性も含む)の日など、属性に応じて部門別・種類別のワークショップを行った。
- ・ 特に女性の方からは、男性が気づかなかった意見として、「お祭りをやるなら午後からにしてほしい」という提案が出た。その理由は、私たちの地域ではお祭りに行くとなると、女性は前日からお重弁当のようなものをつくるのが非常に大変である一方、男性はただ飲んで食べるだけだからである。その話を女性の会で初めて聞いて、なるほどと思った。
- ・ 旗の数も少なくなり、祭りも一日持たなくなってきたので、午後からの開催に変更したところ、女性の方々は非常に助かるということで、現在はこの形式で実施している。

農村 RMO を動かしていくにあたり、事業という側面から見て、お金と人をどのように工面しているのか

岸上氏(コーディネーター)

**村田氏(鉋打ふるさとづくり協議会):**

- ・ 私のところは、中山間地の棚田の直払いを第1期からずっと、全集落ではないが続けてきている。現在、それらを統合し、そこからある程度運営費を出している。
- ・ 直払いの事業は今までにないほど自由度が高い印象で、「これをしたら駄目

だ」ということがない限りは使用可能という判断で進めてきた。それが、農村 RMO の事業を導入する前のいろいろなソフト事業の財源になっている。

- ・ さらに、生活支援で赤字になっている部分については、NPO の福祉会が運営する介護施設で対応している。当初は運営の厳しさを懸念していたが、2,500 万円の借金をして、10 年間でちゃんと完済した。そのため、ある程度うまく運営できれば利益が出て、その利益で生活支援のさまざまなサポートをしている。
- ・ 農業面については、農事組合法人なとうちが現在 87 ヘクタールで耕作しているが、昨年と今年はようやく黒字転換し、かなり収益が出た。しかしそれまでは本当に厳しく、全国的に百姓が一回米作りをやめてストライキを起こし、農水省の顔色を変えてやらねばならない、というような話をいつもしていたほどで、農業そのものは財源としては何の力にもならなかった。ただ、直払いの事業でその部分をフォローしてきたところがある。

#### 尾崎氏(豊かな郷づくり協議会):

- ・ 人を動かすのには、まず同じ方向を向いて仕事をしようということを考えている。今、大学の先生からエリア分けや、若い世代や年配の世代でグループ分けして相談してはどうかという話もありましたが、実際に試してみたところ、若い人は「それは年長者が考えることで、自分たちは忙しくてそこまで考えられない」という声上がり、年配の世代からは「こんなことは若者がすることではないのか」という意見があった。
- ・ 話を聞く側は辛抱しながら、「こちらに進もう」という方向性を見出すためにリーダーには辛抱強さが必要なのだと思う。そして、一度方向性が定まり、「あなたはこれを任せたい」と役割を託せば、ほとんどの人はきちんと責任を果たしてくれる。それが非常にいい点だと思う。だからこそ、そういう人を見出すことが大切だと思う。
- ・ 例えば、「若い頃、機械を扱っていたので、この程度の農業機械なら直せますよ」という人がいれば、「是非おねがいします」と頼む。農機具屋に頼まなくても、地域内で解決できることがある。経理ができる人、会社運営がで

きる人、何かしらの力を持っている人が地域にはいる。そういう人をうまく見いだすことが必要である。

- ・ そして、一番の課題はお金だと思う。農村 RMO では、当協議会にも 1 年目に約 530 万円、2 年目は約 640 万円の、国から補助金で「その事業をしていけばよい」と思っていたが、国からの入金は翌年 3 月に入る。その間、どこかでつなぎの資金が必要になる。それを自分たちが出すのか、市から前もって資金を出してもらうのか、その財源確保が、この事業を運営する上で大きな課題だと思う。
- ・ 村田さんの地域のように、一つの組織を立ち上げて、その利益で運営するという形もあるが、最初のスタート地点がどこにあるかは全国的にはいろいろな事例がある。そうした事例を見ながら、「これはよい」というパターンがどこかにあると思う。そうした運営の仕方を見いだせばよいのではないかなと思う。

#### **奥氏(与布土地域自治協議会):**

- ・ もともとお金がない組織で、事業はほとんど補助金で賄ってきた。最初に古民家の改修をしたのも農林水産省の補助金で、200 万の 5 年間で 1000 万という約束だったが、政権が変わってその制度が頓挫した。
- ・ 補助金が受けられなかった事例もあったが、県の地域再生大作戦などを活用していく中で、メインの事業はありつつ、変化球をかけながら他の事業にも一部を充てることで資金を確保してきた。
- ・ 人については、昔はボランティアで参加してくれる方がいたが、どうしても役員ばかりの話になり、役員が高齢になると負担になってくる。近年では中山間や多面的機能などの交付金事業の中で日当が支払われる制度になっており、日当ができれば協力してくれる人もまだいるため、そうした制度の活用も進めていくべきだと思う。

(新田氏へ)

全国的に見て、事業を展開する上でのお金と人という部分では、どのような状況になっているか。

岸上氏(コーディネーター)

**新田氏(農林水産政策研究所):**

- ・ 全国的な話は難しいため、吉縁起村を中心に話そうと思う。最初の RMO を始めたきっかけと重なるが、もともと吉縁起村は“吉”や“縁起”など、縁起のよい地名が多く、それをきっかけに地域を PR していこうというところから始まった。
- ・ そこに、当初の立ち上げメンバーとは別に、現会長である元高校校長が加わった。この方が退職するタイミングを待ち、退職と同時に本格的に活動を開始した。元高校教員のため、様々なコーディネートが可能であったことから、活動がスタートしたという経緯がある。このような人材は地域に多く存在し、例えば行政や農協の OB など、様々な経験を持つ方がいる。地域の中では具体的に「あの人がいる」というイメージができるため、抽象的な話ではなく、まず具体的な人探しが大事だと思う。
- ・ 資金面では、例えば 100 ヘクタールくらいの中山間地域の農地があれば、年間 2000 万円程度の収入が想定されるため、非常勤職員を雇うこともできると思う。しかし吉地区は 8 ヘクタールしかなく、どう頑張っても百何十万の収入にしかない。おそらく兵庫県のため池地帯なども同様に小さな協定が多く、そこだけで収益を上げるのは難しいと思う。
- ・ スマートストアとして、無人で醤油や味噌を売る店もつくったが、当然それが採算に乗らないことは地元の人も理解している。しかし、それをやることで地域の人が元気になったり、他の地域から視察が来たり、企業を巻き込んだりといった効果が出てきている。その中で、例えば外部人材である地域おこし協力隊のような存在も、市の職員でネットワークを持つ人が探してきて、「一緒に手伝ってみない？」と声をかけ、繋がりが生まれることもある

と思う。

- ・ 現在、3年間の事業期間が終了し、国の予算はなくなった。今は市のNPOへの小さな支援事業を活用し、NPO化して何とか運営を継続しているが、アンテナを張ることで次のチャンスを待っているところだと思う。それは、RMO事業を通じて生まれた様々な人のネットワークを活用することで可能になっているのではないかと思う。

(中塚氏へ)

農村RMOを続けていく場合、どんな人を確保したらいいのか、どのように人を確保していったらいいのか。

岸上氏(コーディネーター)

**中塚氏(神戸大学大学院 教授) :**

- ・ 1点目は、まず人を確保するためには、なり振り構わずあらゆる手段を使うことが大事だと思っている。今のリーダーが頑張って探し、発掘していく努力をしなければならない。
- ・ 自分も、さまざまな活動の勧誘をするなかで、「人さらいだ」と言われることがあるが、人をさらってくるくらいの気持ちが必要なところがあると思う。徹底的に探し、可能性がある人や、地域に戻ってきそうな人を確保していく。村田さんの地域が実践されているように、多様な機会をつくり、その中で人を探していくことをみんなで行っていく。
- ・ 2点目は行政側の視点だが、地域にはどうしても凸凹がある。基本的には住民が主体となって解決しなければならないが、行政側もその凸凹を埋める努力は必要だと思っている。最初の話でも触れたが、そもそも自治や末端行政に対して行政は何をすべきかという議論をしなければならない。ある程度の資金や行政的な人材による下支えがなければ、「全て地元でやってください」というだけでは限界がある。したがってどのようにサポートしていくかは、行政側や我々が現場の声を聞きながら議論し、知恵を絞っていかなければならない。

らない。行政の方々にもぜひご尽力いただきたい。

- ・ 3点目は、お金と人の話はセットだということ。結局のところ、お金を扱える人にしかお金は扱えないと思っている。つまり、金もうけが上手い人しか金もうけはできない。無理をすると大変なことになる。地域活動を重ねる中でそれを学ぶ時代ではないので、一般企業やこれまでのキャリアの中でそうした経験のある人が資金を扱ったほうがよい。そのため、そのような経験を持つ人材をうまく見つけ出し、収益を上げていくほうが賢明である。素人が初めてお金を扱うのは大変だと思う。その中で、地域 RMO が使えるお金は2つあり、1つは補助金、もう1つは民間での収益事業。補助金は行政経験者が得意とするところ。元行政職員や補助金申請に慣れている人を仲間に加え、一緒に進めてもらう。もしいない場合は、行政にサポートを求めながら進める。
- ・ 一方、民間で収益を上げる場合は、その経験を持つ人を役員に迎え入れ、うまく運営していく。たまに両方できるスーパーマンがいるが、なかなかいないため、そのような形で進めていくのがよいと思う。

自分の地域で困っていることを他の地域ではどう対応しているか

岸上氏(コーディネーター)

#### 尾崎氏(豊かな郷づくり協議会):

- ・ 村田さんへの質問。  
私たちの地域は0からのスタートだったが、ある程度組織があったところからまちづくりを行っている。その中で、村田さんは長年この活動に携わっていらっしゃるが、後継者の育成はどのようにされているか。長く関わると、次の人をうまく育てないと組織がうまくいかないため、組織のあり方やリーダーの育て方を教えていただきたい。

**村田氏(鉋打ふるさとづくり協議会):**

- ・ 現在事務局長を務めているが、40年間の協議会の中で自分は4回目。後継者育成で1番悩んでいるのは、自分は昭和23年生まれで、長年共に活動してきた仲間が4人いたが、この10年間で3人亡くなった。年長者だけが残り、若い世代がいなくなってしまった。
- ・ そこで2年ほど前から、地域の中で高校や中学の校長を退職した人に協力を仰ぎ、共に活動している。もう1人は寺の住職で42歳だが、彼も一生懸命協力してくれている。実務的には高校の元校長と協力して進めているが、制度上、校長を退職すると3~4年間は再雇用されるため、なかなか思うように動けない。さらに、住職は浄土真宗で東本願寺の系統だが、能登半島の本願寺がボランティア組織をつくり、その委員長になってしまい、毎日寺を留守にして出かけてしまい、これも困っている。
- ・ 今月19日に北陸農政局のフォーラムが金沢で開催されるが、その時に元校長の1人が参加してくれて、少しずつ後継者候補の方に勉強してもらっている。

自地域の今後の取組や本日ご参加の皆様へのメッセージなど一言ずつ。

岸上氏(コーディネーター)

**村田氏(鉋打ふるさとづくり協議会):**

- ・ 先ほどの説明で、再整備・圃場整備する時に、以前は換地遅延で4年から5年、長いところでは22年にも及んだ集落があったという話をしたが、今回それを一番心配していたところ、換地遅延は一つもなかった。すべて圃場整備が終わって、翌年度に換地が終わった。それだけ農地に対する意識が以前とは大きく変化していることを実感している。
- ・ どの地域へ行っても換地のことを一番心配されているが、これは時代が変わったと思っている。したがって圃場整備を進め、今のスマート農業や低コスト農業を導入しなければ地域を維持していくことは困難だと考えている。

**尾崎氏(豊かな郷づくり協議会):**

- ・ できれば県や市、国の方々とも連携しながら仲間を増やしていきたいと思っている。この機会を通じて、まずはそちらに相談していただければ第一歩が開けると思う。

**奥氏(与布土地域自治協議会):**

- ・ 私たちの地域は、もともと農村 RMO を目指して事業を進めていたわけではなく、たまたま取り組んでいた内容がこの事業にマッチしただけで、農村 RMO については深く考えていたわけではなく、当初から私たちは地域の自律、つまり「地域の課題は地域全体で解決していこう。」という話し合いの中で進めてきた経緯があった。その一方で、「楽しくやる」ことも大事で、「楽しい、面白いこと」とは、やはり「お金儲けができるようになること」だと思っていたので、そういうことを目指してスタートした経過があり、農家レストランの開業は、それが地域の活性化に繋がっていくことを期待した事業展開であったと思う。

**新田氏(農林水産政策研究所):**

- ・ 本日の皆さんの話の中でも、例えば無人直売所、圃場整備、スマート農業、草刈り隊など、様々なキーワードが出てきたと思う。農村 RMO は実は何でもできて、「農村 RMO×〇〇」の「〇〇」をどう考えるかによって、楽しいアイデアはいくらでも生まれると思う。これをぜひ兵庫県でも皆さんで話し合っていていただいて、楽しい地域づくりができればすごく楽しいと思う。

**中塚氏(神戸大学大学院 教授):**

- ・ みんなで支援するって言ってくれている時だから頑張ってみようというところ。災害時によく「受援力」って耳に思う。支援を受ける力。支援を受けるのも能力で、助けてもらうのも能力。あまり自分で全部頑張ろうと思わずに、集落、行政、リーダーや様々な立場の方に助けてもらう、そうやって受け身の力を発揮して、ぼちぼちやっていけばいいと思う。

岸上氏（総括）

本日の挨拶でもあったように、農村というのは危機的状況を超えて、危機の状況にあるというのを、本日ご参加の皆さんの方が現場で感じていると思う。そういった中で、本日のフォーラムを契機に農村 RMO に取り組んでもらえたらと思う。話を聞いただけで終わらず、それぞれの地域で一步ずつ着実に進めていってほしい。

尾崎さんもおっしゃっていたように、今は尾崎さんと奥さんしかおらず、なかなか仲間がいない状況のため、皆さんがどんどん兵庫県内、そして近畿圏内で農村 RMO を立ち上げ仲間を増やしていく。そして、「今後は、自分たちが優良事例となって登壇するんだ」という気持ちで取り組んでいけば、確かな下支えになり、そこから農村が復活していくと思う。そうすると、今ご登壇いただいている皆さんが優良事例ではなく、超優良事例に昇華していくと思うので、そこから頑張っていけたらと思う。

本日のこの機会を活かして、帰る前に多数いらっしゃる行政の方々に、「どうしたらいいのか」を聞いていただいて、明日からどんどん進めていってほしい。